

インターネット俳誌/SEIGETU

清月

3月中の出句 20名 延べ678句



第164号 平成26年 3月

選句のすすめ

ゆたか

俳句に「選句力が向上すれば作句力が向上する」と言う言葉があります。選句は、作句事象のとらえ方や表現を学ぶ方法として極めて有効な学習方法です。囲碁の言葉に「岡目八目・傍目八目」と言う言葉があります。

これは、第三者の立場で対局を見てみると、局面の全体が見渡せることから勝敗を決するコミ出し六目半（古くは五目半）以上の八目分のハマが余計に取れる挿し手や負ける挿し手に気付く、或いは、八手先までの挿し手が分かるという意味でしょうか。

この様な事を踏まえて、出句函の句を第三者の傍観者の立場で鑑賞・選句いただけましたら、自身にはない佳点や作者が気付いていない欠点が見えてきます。

そして、見えた佳点、記憶にとどめ今後の作句の糧にしてくださいたいものです。

「選句の留意点」

○ 初めて目にする季語や言葉で理解出来ない句であってもパスをしないで、歳時記や辞書を活用して句意をくみ取り全句に目を通しましょう。

そして作者は、何に感動し、何を伝えたいのかを感じ取りましょう。

○ 選句の共感句は、清月連絡箱に記載するなど発表しましょう。

発表することにより学び取ったことを長く記憶にとどめることができますとともに、作者に佳句を見せていただきましたと言うお礼の気持ちを伝えることにもなります。

目次

近詠	2
雑詠選	3
寸感	9
十句選	10
十句選	11
十句選	12
十句選	13
十句選	14
十句選	15
十句選	16
十句選	17
十句選	18
十句選	19

順一	伸義	省司	美琴	宏一	山溪	允孝	よし子	恵山	幹夫	ゆたか	ゆたか	ゆたか
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	3	2

近詠

野田ゆたか

清水の舞台袖より涅槃西風
えり袖に立つる逆波東風強し
遠霞日本一のビル聳へ
囃方並びに迷ひ雛飾る
金婚を祝ぎくるる孫暖かし



雑詠

ゆたか選

(太字は秀句)

風ぬくし鹿の擦り寄る島の昼 岡山 橋本幹夫
 火男の面もかなしき大石忌 同
 尊生ふ池へ通じる 獣道 同
 荒東風に明日の風読む漁師かな 同
 移りゆく世も面白し地虫出づ 同
 先駆けて真紅に芽立つ楓かな 千葉 清水恵山
 牛蒡蒔く土柔らかく堀下げて 同
 雛の句を詠みて切なき立子の忌 同
 お塔婆をかたかた鳴らす春の風 同
 鶉馴らしの優しき声の餌づけかな 同

蜩搔き夕陽に向かふ帰り舟 岐阜 石崎そうびん
 船見えぬ七里の渡し涅槃西風 同
 淡々と喜寿を迎へり木の芽和 同
 春泥を小銭鳴らせて跳びにけり 同
 荒東風や重なる絵馬の音たてて 同
 快音の少年野球風光る 吹田 池下よし子
 うぐひすの啼く声いまだととのはず 同
 きららかに雨粒とどめ楓の芽 同
 三月や色よき鯛のカルパッチョ 同
 人影に寄り来る鯉や水温む 同
 ネクタイを外し春愁解き放つ 千葉 田村公平
 合格の校門潜り青き踏む 同
 出でては早や踏まれて育つ名草の芽 同

遠足の園児固まる春の雷 千葉 田村公平
 音も無く車道を濡らす春の雨 同
 ラリー終へテニスコートに春の風 三重 後藤允孝
 沈丁の香の染みつきし石だたみ 同
 風あおり野火の勢ひ猛りたる 同
 セスナ機にゆつくり迫る春の雲 同
 玉筋魚や飛び跳ねるまま茹で上げる 同
 お松明闇夜にぐいと突き出され 愛知 足立山溪
 園丁のすみれ植うるや花時計 同
 三河弁の飛び交ふ茶屋や菜種梅雨 同
 日面の土手にかたまり露の臺 同
 合格の絵馬揺るる庭花明り 同
 鍬先の土ころころと春を舞ふ 大阪 木村宏一

銀河系零れてそよぐ猫柳 大阪 木村宏一
 高々と滝に見立ててしだれ梅 同
 水を蹴る鳥の羽音や春の湖 同
 土の香や力新たに春の雨 同
 寿司店のメニュー新たに雛御膳 三重 山口美琴
 暖かや文化講演満席に 同
 土筆摘む小鉢に少し卵とじ 同
 涅槃西風釈迦の眠りを妨げり 同
 老いてなほ乙女心に雛祭 同
 春の鳥啣えし魚を落としけり 静岡 渡邊春生
 もてなしの緑茶たまはる梅の寺 同
 蛇穴を出でて読経の声を浴ぶ 同
 蝌蚪覗く子らの声々縦横に 同

竹やぶに陽だまり数多暖かし 静岡 渡邊春生
 生垣の椿燃えつきぼとり落つ 千葉 筒井省司
 いづこまで帽子転がす春一番 同
 春の川身動きもせぬ太公望 同
 里山の木々輝きて鳥つるむ 同
 円筒の蕊の際立つ椿かな 大阪 山縣伸義
 強東風や足元ゆるる超高ビル 同
 縦横に鳥除けの糸ぼたんの芽 同
 宗門の庭の静寂に椿落つ 同
 物の芽や入学の子のランドセル 鳥取 瀬尾睦夫
 鞆に二人並びて片思ひ 同
 寒戻り修行の僧も足早に 同
 お返しのクッキー焼ひて日永かな 同

古りて尚目元涼しき内裏雛 愛知 駒田暉風
 二つ三つ御下がり戴く雛あられ 同
 自転車の轍の水に春日かな 愛知 石川順一
 一日中春雨色の心かな 同
 春雲や生きる幸せ一句詠む 山梨 志村万香
 永き日の帳静かに降ろしくる 同
 急ぎ足止めたる路地の梅の花 大阪 森戸しゅじ
 地虫出づ三十路になりし朝かな 東京 橋本幹史

寸感

ゆたか

風ぬくし鹿の擦り寄る島の昼 幹夫

単に鹿と詠めば秋の野生の鹿をさすが、擦り寄るで管理されている無季の鹿となる。

島の鹿は、宮島（広島）・鹿島（愛媛）などで見掛けるが、「ぬくしと鹿」から春の島の景がゆつたりと広がる。

先駆けて真紅に芽立つ楓かな 恵山

楓は、小さな冬芽から柔らかく小さな深紅の芽が吹き出る。

柳・薔薇・牡丹などより早く芽を出す楓を見つけて句心を搔き立てられた作者。

事象の先取りに敬意。

蜆搔き夕陽に向かふ帰り舟 そうびん

蜆漁は、年間を通じて行われるが、俳句で単に蜆と詠むと春の季題となる。

夕日の景が美しい。帰れば、翌朝の出荷に備えて砂出し作業などがあるのでしよう。

漁師の良い生活の様子が伺える。

快音の少年野球風光る よし子

少年野球は、中学生が主の硬式野球で金属バットを用いる。

四方は麗かであるが、打撃音は吹く風さえも光っているように感じるといふ作者。

風光るがよく効いている。

ネクタイを外し春愁解き放つ 公平

春は、華やいだ気分になる反面、もの憂い感じになることがある。

ネクタイを外すときの開放感が心地よく伝わってきます。

気持ちの変化を上手く詠まれている。

春の鳥啜えし魚を落としけり 春生

ついうかりすることが春の人の様に鳥にあるというユーモラスが詩情として広がります。

一瞬の景が上手く詠まれている。

共感一〇句

橋本幹夫 選

淡雪やうだつの町を蛇の目傘 石崎そうびん

田楽や八丁味噌の蔵通り 足立山溪

沈丁の香の染みつきし石だたみ 後藤允孝

快音の少年野球風光る 池下よし子

黄水仙とがの木茶屋に花明かり 木村宏一

桃の日の華燭の典や五十年 山口美琴

闘牛に勝てば涙の育て親 清水恵山

地虫出づ三十路になりし朝かな 橋本幹史

たんぽぽの黄の灯したる荒野かな 山縣伸義

夕霞対岸のビル飲み込めり 筒井省司

共感一〇句

清水恵山 選

淡々と喜寿を迎へり木の芽和 石崎そうびん
暫くは香りに満ちて梅の里 後藤允孝
八荒や湖にこんもり竹生島 橋本幹夫
春風を懐に入れ届けけり 瀬尾睦夫
うぐひすの啼く声いまだとのはず 池下よし子
生垣の椿燃へつきぽとり落つ 筒井省司
転勤の荷物を送る花の雨 渡辺春生
田楽や八丁味噌の蔵通り 足立山溪
春分の陽だまりを打つ時報かな 田村公平
春耕の鋤ひと振りや土生きる 山口美琴

共感一〇句

池下よし子 選

急ぎ足止めたる路地の梅の花 森戸しゅじ
古りて尚目元涼しき内裏雛 駒田暉風
船見えぬ七里の渡し涅槃西風 石崎そうびん
移りゆく世も面白し地虫出づ 橋本幹夫
お松明闇夜にぐいと突き出され 足立山溪
寿司店のメニュー新たに雛御膳 山口美琴
ネクタイを外し春愁解き放つ 田村公平
ラリー終えテニスコートに春の風 後藤允孝
地虫出づ三十路になりし朝かな 橋本幹史
福島を忘れまいぞと卒業す 梅津弘子

共感一〇句

後藤允孝 選

高々と滝に見立ててしだれ梅 木村宏一
 淡々と喜寿を迎へり木の芽和 石崎そうびん
 強東風に軋むばかりの舫ひ綱 橋本幹夫
 永き日や帳静かに降りゆきて 志村万香
 田楽や八丁味噌の香の満ちて 足立山溪
 人影に寄り来る鯉や水温む 池下よし子
 春耕の鋤ひと振りや土生きる 山口美琴
 牛蒡蒔く土柔らかく掘下げて 清水恵山
 生垣の椿燃へつきぽとり落つ 筒井省司
 ネクタイを外し春愁解き放つ 田村公平

共感一〇句

足立山溪 選

遺言状書いてまた消す春炬燵 石崎そうびん
 万葉の歌碑を探して青き踏む 同
 船見えぬ七里の渡し涅槃西風 同
 過ぎ去りし日日を語りて暖かし 後藤允孝
 雨の夜の香を濃くしたる沈丁花 同
 先駆けて真紅に芽立つ楓かな 清水恵山
 紫雲英田やむかしは何処も子沢山 橋本幹夫
 急ぎ足止めたる路地の梅の花 森戸しゅじ
 もてなしの緑茶たまはる梅の寺 渡辺春生
 快音の少年野球風光る 池下よし子

共感一〇句

木村宏一 選

急ぎ足止めたる路地の梅の花 森戸しゅじ
塞ぎたる炬燵恋しき夜の酒 橋本幹夫
お松明闇夜にぐいと突き出され 足立山溪
芽柳の鴨川ほとり阿国舞ふ 池下よし子
先駆けて真紅に芽立つ楓かな 清水恵山
春耕の鋤ひと振りや土生きる 山口美琴
いずこまで帽子転がす春一番 筒井省司
暫くは香りに満ちて梅の里 後藤充孝
春の鳥啞えし魚を落としけり 渡邊春生
縦横に鳥除けの糸ぼたんの芽 山縣伸義

共感一〇句

山口美琴 選

急ぎ足止めたる路地の梅の花 森戸しゅじ
銀河系しづれてそよぐ猫柳 木村宏一
古りて尚目元涼しき内裏雛 駒田暉風
淡雪やうだつの町を蛇の目傘 石崎そうびん
池の辺の風やはらかに柳の芽 橋本幹夫
園丁のすみれ植うるや花時計 足立山溪
うぐひすの啼く声いまだとのはず 池下よし子
雛の句を詠みて切なき立子の忌 清水恵三
春泥は気遣い無用帰宅の子 田村公平
沈丁の香の染みつきし石だたみ 後藤允孝

共感一〇句

筒井省司 選

老いてなほ乙女心の雛祭 山口美琴
牛蒡蒔く土柔らかく掘下げて 清水恵山
人影に寄り来る鯉や水温む 池下よし子
寒戻り修行の僧も足早に 瀬尾睦夫
凶体のでかき女子と独活を掘る 橋本幹夫
春めきて電話のやりとり多くなる 石川順一
ランドセル背負ってみる子初燕 石崎そうびん
高々と滝に見立ててしだれ梅 木村宏一
沈丁の香の染めつきし石だたみ 後藤允孝
靴先に春の土付け野菜売り 田村公平

共感一〇句

山縣伸義 選

嫁姑仲良くせよと田螺鳴く 橋本幹夫
移りゆく世も面白し地虫出づ 同
正門の大樹仰ぎて卒業す 池下よし子
大石忌お香絶えなき泉岳寺 清水恵山
淡々と喜寿を迎へり木の芽和 石崎そうびん
ぶらんこの高く飛び出す地平線 瀬尾睦夫
春めくや僅かな服を着迷へる 田村公平
幼子は少し気取つて雛の客 駒田暉風
靴底を撥ねる力や春の土 木村宏一
桃の日の華燭の典や五十年 山口美琴

共感一〇句

石川順一 選

嘯や建替へられし法学部	池下よし子
路地裏の猫はつれなし黄沙降る	同
若芝の緑染み付くボールかな	田村公平
高層の窓それぞれに春愁ひ	同
古池の抽象画めく薄氷	山縣伸義
梅の園いか焼きの香に負けてをり	山口美琴
卒業や尊徳像を磨き上げ	足立山溪
彼岸会の法話結びの歌合唱	清水恵山
青空へ間合を詰めし土筆かな	後藤允孝
春風を懐に入れ届けけり	瀬尾睦夫

インターネット俳句 清月
第164号
平成26年3月中の出句から

発行
平成26年 3月20日

主宰 兼 編集
野田ゆたか

発行所
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
[https://haiku575.info/seigetukai/
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)